

令和元年度地域包括ケアシンポジウム〜地域で支えよう大切な人〜
「ぼけますから、よろしくお願いします。」を開催しました。

12月8日、日南町総合文化センターさつきホールを会場に、地域包括ケアシンポジウムを開催したところ、昼の部218人、夕方の部29人の方々に参加いただきました。

ドキュメンタリー映画「ぼけますから、よろしくお願いします。」の概要を紹介します。

東京でテレビディレクターとしてドキュメンタリー制作に携わっている信友直子監督は、45歳の時に乳がんが見つかり手術を受けることになりました。悲しみ嘆く娘を、母親はユーモアたっぷりの愛情で支えました。娘は人生の危機を乗り越え、両親の生活を映像で記録し始めます。やがて、母親が認知症の診断を受けます。

広島県呉市で暮らす85歳の母親と95歳の父親の日常生活を通して、認知症による様々な生活上の支障、母親の不安な気持ちや苦しみ、父親の対応と家事への挑戦、介護サービスを利用することへのためらい、サービス利用することにより生まれた気持ちのゆとりなどが、ひとり娘である監督の視線で、呉の美しい風景とともに、丁寧に描かれていました。

トークセッション 信友直子監督を招いて

昼の部のトークセッションについて、要点を紹介します。

○両親の映像は2001年ごろから撮り始めていました。認知症になる前の母の映像が多くあることに



より、「その人には歴史がある」ということがわかっていただけだと思います。

○「認知症の人は何もわからなくなる」と思っていました。母を見てるとそうではなく、本人がはじめに変化に気づき、一番つらく苦しんでいると知りました。そのことを、知っていただいたいと思えました。

○はじめは、「あのすっかりした母が・・・」と残念であり、負の感情がありました。しかし、向き合っていくうちに、母のかわいらしいところや父の良さがわかり、気丈だった母が父に甘えられるようになったり、自分と父の距離が近く感じられたりと、母が認知症になったことは、悪いことばかりではありませんでした。

○介護サービスについては、二年間は父が受け入れず「男の美学、わしが面倒をみる」と頑固でした。担当の人に出会って信頼関係ができると、それからあとはスムーズでした。

介護サービスを利用することで、母は社会とのつながりを持って、父は相談できる場所ができ、心に余裕ができました。父は今では「年寄りにとって社会参加とは、社会に甘えることなんじゃないの。」と

言います。大きな変化です。

○「ぼけますから、よろしくお願いします。」は、母の言葉をタイトルにしたものです。母は、自分の状況をよくわかっていて、今も変わらずユーモアのある人で、そう言っています。また、みんながそう言える社会になってほしい、という願いでもあります。

○「認知症になった」ということは動かし難いことです。しかし、いかに楽しく暮らすかということは、考え方次第です。自分はカメラを通して少し客観的に両親を見ることができました。認知症のある人は、不安感から自分がじゃまなのではないかと思いつらに不安が増すようです。介護サービス利用などで心に余裕ができると、家族が笑顔になります。家族や周囲の人が笑顔だと、認知症のある人は「自分はこの居ていいんだ」と安心できます。これがとても大切なことです。と話されました。

